

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.248

ISSN 2432-5295

生きた建築
ミュージアム
フェスティバル
大阪

ご

ちゃ

ま

ぜ

関内外 OPEN!

ひろしま
たてものがたり

オープンハウス
カゴシマ

C O N T E N T S

- ◆【ごちゃまぜ】・・・01 ～ 04
- ◆今、こんな仕事をしています・・・05 ～ 08
- ◆近況&イベントのお知らせ・・・09 ～ 10
- ◆アルパックの Ring!・・・10
- ◆まちかど・・・裏表紙

「ごちゃまぜ」

昨今、いろんな場面で「ごちゃまぜ」のよさが評価されています。組織論でも、まちづくり理論でも、社会論でも。ソーシャルインクルージョンとかミクスْتُースとか。さまざまなものが多様に混ざっているのがよいのだと。ある意味ではモダニズム的指向に対する反動ともいえるでしょう。

しかし、混ぜるな危険！というものもあれば、絵の具のように混ぜると濁ってしまうもの、光のように混ぜると無色透明になってしまうものもあります。無批判のごちゃまぜ礼賛には注意が必要です。

「ごちゃまぜ」のよさは、混ぜられている個々の要素の個性が失われることなく、引き立てあっていることではないでしょうか。混ぜることではなめらかなるのではなく、むしろザラザラ、ツブツブしていること。「ごちゃまぜ」のよさを引き出すのは難しいと思うのです。

レタースアルパック編集委員会

組織のエントロピー

柳井正義：
総務部

「ごちゃまぜ」↓「乱雑、無秩序」↓「エントロピー」と連想し、アルパックの組織について雑感を記す。

15年前転職してきたとき、この会社は割と残念な状態であった。1990年代のポストバブル期に規模的なピークを迎えたのち、2000年代は縮小傾向にあったようである。しかし、2012年に故森脇さんが代表取締役社長に就任され、「これからV字回復を目指す」と力強く宣言されたことが転機となり、以降は拡大基調となっている（委託外注費を除くネット売上高ベースでみると2010年から2023年で約2倍になっている。いま振り返ると筆者が入社した時期がどん底だった）。

2012年に組織改革を行ない、「専門グループ制」を経営単位としたことが回復の原動力となった。それまでは地域密着型の「地域事務所制」を標榜していたが、アルパックが扱う地域の課題はどんどん高度化していたので、専門家をまとめるほうが時代の流れにマッチしていた。そして、各専門グループには将来のアルパックを担う中堅のチームリーダーを配した。言い換えると組織を無秩序な

状態から秩序のある状態に組み替えたわけだ。エントロピーの増大に抗うのだから最初はエネルギーが必要だったが、ある程度までいくとあとは自己組織化が進んだ。オーガナイズ／組織化は生物のorgan／器官から派生した言葉で、「生命とは負のエントロピーを食べるもの」という説を思い出し、社会的組織と生命体と比べて考えてみるのは面白い。

「秩序」と並んで重要と考えるのが「自由」である。アルパックは後者を重視する人が多い。秩序だけでは息苦しいが、秩序のない自由では人が集まる意味がない。両者のバランス＝「秩序ある自由」はなかなかむずかしいテーマだ。

さて、アルパックの組織はこの先どうなっていくのか。地域密着を続け、専門性をもっと磨いていきたい。これらを引き継ぐ第三のあり方はあるのか？複雑化する社会課題に対し単一の専門性で解くことはむしろ難しく、異なる専門人材の組み合わせ＝「複合化組織」がキーワードと考えている。もうひとつ、閉じた系は平衡状態に向かうので、常に外部から人材を採り入れることが重要である。

ごちゃまぜな要因を紐解いて まちづくりを考える

太田雅己：
生活デザイングループ

活動で作成したホームページ▶



漁港の風景

業務外の活動として、淡路島で空き家対策に向けた活動に取り組んでいます。

対象エリアは洲本市の炬口地区で、洲本市の市役所などがある中心市街地から川を隔てたところで、海に面している、漁村集落を起源としたまちです。

関わりのきっかけは、2013年に淡路島地震という最大震度6弱の地震があり、その時にJIA※のメンバーが被災状況の確認を行い、漁村集落の形態による空き家や空き地が多い地域の課題に対して何かできないかと、地域との関係がはじまりました。

これまで地元の住民会や、市の担当課等と議論や調査をしました。空き家が流通せずに放っておかれている要因ですが、登記や相続登記ができていないこと、仏間がある、家財がたくさん残っている、接道条件の悪さや駐車場が確保できないなどの不便さから世帯分離を機に別の住宅地に出ていく、路地なので工事車両が入らないために工事費がかさむ、他にも田舎特有の人間関係など、様々な要因があ

り、一筋縄では空き家は動きそうにありません。

一方で、利活用の需要はありそうです。写真のような良いまちなみで、本瓦葺きの渋い物件も残っています。炬口は釣り場でも有名で、週末には大阪や京都などから釣り人が多く来ています。地元住民の皆さんがまちなみを見せると、ここでこんな写真が撮れるんだと驚かれたのが印象的でした。

具体的な物件の活用などはできていませんが、地域のポテンシャルを上手く混ぜ合わせながら、課題を紐解いて少しずつまちを動かしていけるといいなと思います。

※この活動はJIA（公益社団法人日本建築家協会）都市デザイン研究会の活動であり、私はJIAの正会員ではありませんが、地元出身者であり、準会員として活動に参加しています。



路地のまちなみの様子

「不寛容な社会」について

清水紀行：
都市・地域プランニンググループ

近年、多様性（ダイバーシティ）や社会包摂（インクルージョン）と言った言葉が様々な場面で使われ、自分とは異なる価値観を互いに認めあい、共存・共栄することの重要性がうたわれています。その趣旨に疑う余地はないと誰もが分かっている一方で、世界中で争いは絶えず、生きづらさを感じる人がたくさんいます。

私が、最初「ごちゃまぜ」というお題を聞いた時、『異質なものを受入れない／受け入れることができない』『不寛容な社会』を連想しました。

例えば、ネット社会ではその傾向が顕著です。誰もが手軽に自らの考えを発信でき、時には社会を動かす一助となり得るボジティブな面がある一方、単なる感想やコメント、自分と直接関係ない話題（芸能人の不倫問題等は最たる例）に対しても攻撃的で、論破することを目的としたような書き込みが増え、所謂「炎上」状態となりがちです。このような「不寛容さ」は何故生まれるのでしょうか？日本での理由として「島国特有の同質性社会」が挙げられることがあります。海外にはあてはまり

ません。理由はひとつではないと思いますが、個人的に腑に落ちたのは、ある精神科医が言っていた「防衛本能の表れ」です。私たちの社会生活はストレスと切っても切れない関係にあります。そのストレスを昇華（消化）させるひとつの手段が異質な者への攻撃（差別と言い換える場合も）を通して、自分の立ち位置を確保し安心感を得る…それが「不寛容な社会」の一面であるという論です。

しかし、相手のマウントを取って自分の立場を上げる行為は自分の弱さの裏返しです。それでは他者の共感を得られず、結局、社会全体の幸福度が上がることはないでしょう。

心理学用語に「ラディカル・アクセプタンス」という表現があるそうです。良いか悪いかはさておき、現状を受け入れる姿勢のことを意味しています。今の自分自身をありのまま受け入れつつ、リスpektする自尊心を育むことが、他者を受容する「寛容な社会」に近づくはじめの一步なのかもしれません。

ごちゃまぜの旨み

小宮伊織：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

食いしん坊の私は「ごちゃまぜ」と聞くと、ついグルメを連想してしまいます。お好み焼き、炊き込みご飯、カレーライス、ジャージャー麺と美味いごちゃまぜ飯をあげたらキリがありません。食べ物以外にも、盛り場や界限などの都市空間はもちろん、さまざまな価値観、属性の人が混ざり合う社会はそれぞれが相互作用して「旨み」を出しているのではないのでしょうか。なぜ、ごちゃまぜには「旨み」があるのか少し考えてみたのでつぶやいてみようと思います。

「ごちゃごちゃ」と「ごちゃまぜ」は若干違うように感じますが、「ごちゃごちゃ」は、ただ乱雑・無秩序・雑多に異なる物体が存在しているだけに過ぎませんが、混ざり合うことで互いに関係が生まれ、そこに「旨み」が生まれるように感じます。お好み焼きを作る際にも、空気をよくふくませて軽く混ぜることで美味しくなります。混ぜるという動作は「旨み」を出すのに必須の条件のようです。一方で、すべての物体同士が結合・融合するまで混ぜすぎても旨みが出ないのではないのでしょうか。物体同士が付かず離れずの関係で



よく混ぜると美味いらしい

ごちゃまぜの可能性

芳田知紀：

都市再生・マネジメントグループ

ごちゃまぜと聞くと、何となく消極的なイメージを持ちますが、ふと生活の中に目を向けると「ごちゃごちゃまざっている」状態でいてこそ、良く感じるものは身近にあります。例えば、最近まちかどで見た看板ですが、関西に住んでいれば誰もが目にしたことがある「ジャンボ総本店」の広告。全体を俯瞰してみると、すぐごちゃごちゃしているのに、どこか、デザインに統一感があり、ジャンボのブランドイメージを作る重要な要素になっています。意図的にカオスを作り、秩序を作るデザインをしているのか…。これはどう認識するか異なりますが、見るものに解釈の余地を



街角で見つけた「ごちゃまぜ」を上手く魅せている店舗

与えているような気がします。さらに広い視点を持てば、歓楽街の広告物もごちゃまぜですよ。もし、ミナミのまちなみが淡色のみで形成されていればどうでしょうか。楽しいまちといえるでしょうか。確かに、景觀デザインとしての統一は図れますが、あのごちゃまぜな広告物群がつくる、人間の活動がふれる場面が良いと私は感じます。ごちゃまぜになって広告物群の中には、商業者それぞれが、他より目立とうとある種競争した結果であろうと思うと、なおのこと、ストーリーが想像できるし、情熱があふれているように感じます。

結局は、何をどう見るか、または、どう表現するかによって異なります。「ごちゃまぜ」は、ネガティブにもポジティブにもなりうる不思議な言葉ですね。また、ごちゃまぜは、いろいろ混ぜた後に何かが生み出されるような期待感もあります。多様性が叫ばれている時代ですが、すべてを統制しようとする考え方でなく、もうごちゃまぜになることを肯定し、その結果、生み出されるものに期待する、みたいな考え方もあって良いものだと思います。

「ごちゃまぜ」から考える 心地よい空間づくり

高瀬咲：
地域再生デザイングループ

京都の市街地はコロナ禍を経て活気が戻り、国内外の観光客が行き交う「ごちゃまぜ」な光景が日常となつています。「ごちゃまぜ」という言葉は本来、にぎわいや多様な人々が交じり合うといったポジティブな意味合いがあるはずですが、京都で日常生活を送る私にとっては少し疲れの感情が強い言葉です。

一方で、近年の公共空間には「ごちゃまぜ」が心地よく感じられる場も増えているように思えます。最近、公共施設や空間の活用等の業務を通じて、さまざまな場所でヒアリングや視察を重ねる中で、「にぎわい」「居心地の良い」「多様な活動が起こる」「まちや空間について考える機会が多くありました。雑感になりますが、それぞれ



普段開かれていない場所で知らない人同士が混ざり合う
：湊の芸術祭（坂井市三國）

が「ここにいたい」と感じている人が多くいるとき、まちのにぎわいにつながると感じています。その中に、何かを生み出すとする能動的な人々もいれば、のんびりと寝転んだり、静かに佇むような受動的な人々もいることが理想的です。

そのようなシーンは、「互いに敬意を払い合う秩序やルール」「フレキシブルであり、想定外の利用を許容できる柔軟な空間」、そして、「その場所を好きで居心地よさを保とうとする誰かの存在」があつて、はじめて実現できるのではないかと思います。

アルパックで行う社会実験やワークショップは空間を活用する上での諸条件やニーズ等の検証を行うだけでなく、場所と人その場所に集う人同士の関係性の構築を行うことも重視しています。関係性をつくる中で、互いの領域を尊重しながら「ここにいたい」「あなたもここにいたい」とそれぞれが思えるようになることで、心地よい「ごちゃまぜ」につながるのではないかと思います。

今後、人々が尊重され、穏やかな気持ちで集える「ごちゃまぜ」の空間を増やす実践をしていきたいと思っています。京都事務所周辺もそうなればと切に願います。

不思議なデジャブ感

中村孝子：
企画政策推進室

地方都市の市街地を車で走っていると携帯ショップ、ファストフードなどどこでも見かける店舗の看板が立ち並び、まちの風景はどこも同じ。スッキリして見えるかもしれないけどまるで金太郎あめみたいで面白くない。地域特有の文化や歴史があるはずでそれが感じられない。

さて、7年ほど前から年に2回は友達とフェリーで釜山旅行に行っている。船中2泊現地1泊という行程で現地には丸一日滞在という強行軍だ。お隣の国

には、日本の統治時代の近代建築がいくつに残っていたり、庶民の識字率の普及を目指したハングルの誕生やその後の歴史など個人的には学ぶことがとても多い。

いまだにハングルが分からない私だけど、年々スマホのアプリが進化してきて、会話の翻訳や画像による文字変換機能のおかげで快適な旅を楽しめている。回を

重ねるにつけ観光地は行きつくし、ここ数年は釜山港



に着岸後、真っ先に地元の漁港や商店街に向かう。

市場には、いろんな店舗、食材、におい、色彩、ハングル文字、たくさんの人と会話がごったがえす。ものすごいエネルギーを感じる。そして、これらが入り混じったごちゃまぜ感がたまらなく楽しい。迷路のような路地に入ったり、どこを歩いてもワクワクする。

アプリを駆使して対面販売のお店で食材などの質問、値段の交渉をしたり、食堂では日本ではあまり見かけない食材がごちゃまぜに入った鍋に箸をつつく。いろんな魅力が満載だ。そして、異国にいるのに不思議なデジャブ感。そうそう子どもの頃はどこの商店街もごちゃまぜの活気があつたはず。なんだかとても懐かしい。

これから冬の味覚が美味しい季節。釜山が私を呼んでいる。そろそろ旅に出よう。

長岡京市での防災・スポーツ施設整備づくり ～ゲーム型防災研修プログラム「風水害24」を活かした 住民ワークショップの開催～

石井努：

地域再生デザイングループ



ゲーム型防災研修プログラム「風水害24」の様子

昨年度から今年度にかけて、長岡京市の東部にある「東ポンプ場」の除却後跡地に防災・スポーツ施設を建設する構想づくり、その後の基本計画策定の業務に取り組んでいます。

市域東部は住工が混在する地域になっており、公共施設が比較的少なく、災害時の避難所になる施設等も少ないエリアです。まちの防災を考えていく上で防災拠点となる施設を確保することが重要なテーマになっています。

一方、施設整備を予定している地域の周辺には、自治会がない町内もあり、地域のコミュニティの形成や防災意識の向上も重要な課題となっていました。昨年の構想づくりにおいては、施設の計画づくりに地域の住民を巻き込み、地域の意向を把握するとともに、防災意識の

向上につなげていくため、ゲーム型の防災研修プログラム「風水害24」を取り入れました。

このプログラムは、大規模風水害の接近から直撃・通過までの24時間をリアルに体験することで、風水害発生時に適切な判断や行動するための知識や行動指針を学べるゲーム型プログラムとなっています。実は、私自身、「風水害24」の研修を受けたことがあり、その際に講師として指導いただいた乾昌志さんに長岡京市でもファシリテーターを引き受けていただき、有意義な参加型のワークショップを開催することができました。「防災」という、人の命に関わるテーマで、自治会がない地区を含め、住民参加型のワークショップを開催するのは大きなチャレンジでしたが、参加いただいた住民からは好評で、今年度の基本計画づくりにうまくつながっていくことができていると感じています。

今年度の取組においても、避難ルートの確認等を行うまち歩きを含め、住民参加のワークショップを開催する予定です。施設整備をきっかけに地域の防災意識の向上や地域コミュニティの醸成にもつなげていくよう、しっかりと取組を進めていければと思います。

「絵本のまち板橋」のバナーフラッグを 掲出しました

江藤慎介

地域産業イノベーショングループ

「絵本のまち板橋」を聞いたことがありますか？

板橋区は、中央図書館内に「いたばしボローニヤ絵本館」が併設され、イタリア・ボローニヤ市から寄贈された絵本等を約3万冊所蔵し、また絵本を含む印刷・製本産業が多く立地する特徴に着目し、「絵本のまち板橋」のブランディングを推進しています。SDGs未来都市にも選定された板橋区が絵本を基軸に振興していくため、アルパックでは今年度から絵本に関する資源調査や、将来のユネスコ創造都市ネットワークへの加盟を目指した取組の検討を行っています。

調査を進めると、「絵本のまち板橋」を知らない区民もたくさんいることが分かり、プロモーションの一環で、板橋区役所から大山駅までの遊座大山商店街で「絵本のまち板橋」のバナーフラッグを掲出しました（10月中旬～11月上旬まで）。デザインは10種類もあり、表面は今年の「絵本のまち広場」（区民まつり同日併催する、絵本販売やワークショップ



「絵本のまち板橋」バナーフラッグ

を行うイベント）のデザインを担当された株式会社10に依頼し（代表の柿木原さんも数々の絵本を作っています）、裏面は絵本作家の三浦太郎先生が作画を担当したSDGsボードゲーム「いたばしさんぽ」のデザインを採用したものです。いつもの商店街が、絵本のもつ、かわいらしいけれど華やかな雰囲気になっていきます。せっかく作ったバナーフラッグ（74枚）をそのまま捨てるのはもったいない！ということで、現在新たな企画も検討中。「絵本」というコンセプトでどのような共創が起こるか楽しみです。

坂出市中心市街地活性化公民連携事業に取り組みます

和田裕介：

建築プランニング・デザイングループ

香川県坂出市では、中心市街地の再生を図ることを目的に、「坂出駅前エリア」及び「坂出緩衝緑地エリア」を再整備するPFI手法による「坂出市中心市街地活性化公民連携事業」を進めています。

8月27日に行われた事業者選定委員会の審査を経て、アルパックも一員となる大林組を代表企業とするグループが、優先交渉権者として選定されました。

本事業では、坂出市中心市街地に、子育て世代をはじめ多様な世代が日常的に集い交流し、幸せを実感できるような「居場所」や「機会」を創出し、居心地の良いウォーカブルなまちづくりを展開します。

「坂出駅前エリア」には、図書館を核とする駅前拠点施設を整備します。

駅前拠点施設は、エントランスから最上階まで貫く4層の吹抜けを設け、本に囲まれた特徴的な空間を創出します。吹抜けを介した南北の床は、半階上下にずらしたスキップフロア形式を採用することで、開放的で一体感のある空間を形成します。

運営においては、「まちの回遊を始める起点となる場所」として、「まちの魅力につながるイベント」を展開するとともに、市民や来訪者のサードプレイスとして、「図書を借りる場所」

から「過ごす場所」になることをめざします。

「坂出緩衝緑地エリア」には、既存の豊かな緑を活用し、健康な暮らしを実現するにぎわい拠点づくりに向け、新しいシンボルとなる芝生の丘や、象徴的なアースワークによる新たな顔づくりを行う他、公園内の活動を高める管理棟、テナント棟、カフェ棟などを整備します。

アルパックのミッションは、自主事業の展開による「みんなのココロよさ」がかなうまちの実現です。さて、事業満了の2045年3月末、坂出の中心市街地がどのような姿で再生されているか！？



図書館を核とする駅前拠点施設（出典：坂出市 HP）

公園でのボール遊びの可能性について調査しています

山崎将也

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

子どもの頃、公園や空き地で野球をして遊んでいた、という年齢がばれるのでしょうか？

街区公園などで利用に関する様々な禁止事項が定められるようになったのがいつ頃かは分かりませんが、近年、色々な自治体で公園利用のあり方に関する動きが見られるようになってきています。

板橋区内の公園でも利用に関する禁止事項が定められており、その中に危険なボール遊びが含まれています。ただ、どのような遊び方が危険か明確には示されていません。

今年度、板橋区内の公園利用の実態を調べるとともに、公園でのボール遊びの可能性について検証する調査業務を行っており、9月から10月にかけて公園利用に関する調査を行いました。公園の施設・設備の状況調査のほか、利用者（子ども、大人）



公園入口の禁止事項の看板



安全？なボール遊びを楽しむ親子

を対象に、子どもには公園での遊び方やボール遊びの内容、大人にはボール遊びなどにより迷惑を受けたことがあるか、などについてヒアリングを行いました。

いずれの公園でも、ボールなどで遊んでいる子どもたちは、周囲の状況を確認し迷惑にならないよう気を使いながら遊んでいる人が多く、マナーを守った遊び方をしていることが非常に印象に残りました。周囲の大人たちも子どもを温かく見守っていることが分かり、社会が子どもを育てる一端を垣間見た気がして、仕事ではありましたが、心洗われるような時間を過ごすことができました。

今回の調査を通じて、公園とはマナーの他にも共生や多様性を学ぶ身近な機会であるとの思いを持つとともに、平日にお父さんと一緒に遊ぶ子どもを見ても、自分の頃とは時代が違うのだから、とやはり年齢がばれそうないを抱きました。

小さな村の新しい庁舎

原田稔：

建築プランニング・デザイングループ

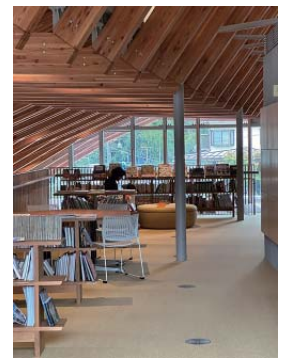


1階ロビー

今回、ご紹介させていただく上北山村は奈良県の東南地域に位置し、東に大台ヶ原、西に大峰山脈を配する大自然に抱かれた谷合の小さな山村です。

私たちは今、そんな小さな村の老朽化した庁舎の再整備に向けての支援をしています。都会では、併設された広場やホールでの華やかなイベントや住民活動の発表などをアピールした、キラキラした新しい庁舎が一つの潮流になりつつありますが、人口420人余りで高齢化率50パーセントを超える村にそんなキラキラを持ち込むことは悩ましく。そんなモヤモヤの中、山梨県の丹波山村に新しく建設された村役場庁舎を視察しました。

丹波山村は人口が500人余りの山村で、97パーセントが山林と言う上北山村と似た条件にある村です。新しい庁舎は各課が1階にまとめられ、業務カウンターの前が広いロビーとなっており、2階には絵本を中心とした図書コーナーやフリースペース、会議室が配置され、休日にも村民に開放されています。また、この庁舎には議場がなく、2階の大会議室が兼用されている点も特徴的です。案内の職員の方のお話によると、平日も休日も親子連れが遊びに来たり、学生さんが勉強したり、バス待ちの人が井戸端会議されたり、村民の新たな居場所となっているようで、休日は職員2名が常駐されているもののセキュリティラインも無く、小さな村ならではの村民同士の信頼関係の中で心地よく過ごせる空間となっていました。お話の中で「業務中間こえる子どもの声も癒しになるし、職員の会話も穏やかになった」と言っておられたことも印象的でした。



2階フリースペース

城陽市 JR 長池駅前の公用地を活用すべく 地域活動が活発化しています

芳田知紀：

都市再生・マネジメントグループ

JR長池駅は、京都府城陽市に位置し、1日の乗降客数は2400人程度の小さな駅です。

城陽市では、このJR長池駅周辺の整備に向けた取り組みを進めています。このような状況下で、にぎわい創出に向けた駅前の公用地をあり方を検討する業務をアルパックは受託しています。

この駅前の公用地はもともと、市が駅前広場の計画地として買収したものでしたが、事業着手に至らず未利用地となっていた土地です。この業務では、昨年度より地域住民と市とアルパックが共同で検討を進めてきました。そして、11月3日から17日までの2週間、検討した活動をより具体化し、駅前の公用地で実施する社会実験を行いました。

期間中には、様々な活動が実施されました。例えば、広場で皆の好きな本を紹介しあう競技ビブリオバトルを行ったり、焼き芋を焼いたり、音楽を通じて楽しみを共有したり、まち協が考えたキャラクターを印字したベビーカーステラを販売したりなど、様々なアクティビティが起きました。

社会実験では、住民活動として様々なアクティビティが行われましたが、今後これらの活動を

をどのように定着させていくのか、城陽市として今後どのような公共投資を行うのか、まだ方向性は固まっていませんでした。このような地方の駅前空間では、まちづくりの登場人物が各々に役割を果たし、協同で作り上げる姿勢が不可欠です。この姿勢をどこに向けるのか、今回の社会実験でかなり具体的なものになりました。

この機を逃すことなく、各々の役割を明示し、地方なりの官民連携により、身の丈にあった駅周辺整備ができるのではないかと考えています。そして、この役割を形にし、文書などで見える化することでコンセンサスを図ることが我々の課された使命の1つです。その結果、両者が協同することでできる駅前空間の可能性を妄想しつつ、使命を果たしていきたいと思っています。



WSで製作した机を囲んで団欒する様子

アグリビジネスの種を探し、みんなで耕そう



交流会の様子

KYOTO Agri-Business Caféのページ▶



武藤健司：

地域産業イノベーショングループ

京都市では、「新しい農業のカたちを考えるビジネス交流会」と題して、農家や民間企業、関係団体、大学、金融機関等の多様な主体が集まるプラットフォーム「KYOTO Agri-Business Café」を令和3年度に創設しています。

新たな農業関連ビジネスの創出や課題解決に向けて熱心な議論や取組を重ねており、今年度は当社も事務局として支援しています。

9月5日、京都信用金庫 QUESTION にて交流会を開催しました。今年度を実施する3つのプロジェクト（※）について、それぞれの紹介者が発表！約50名の参加者からは、「ぜひ連携したい」、「継続性が大事ではないか」、「実現に向けては、小さな集まりを作ってい

くべき」など、多くの意見やアイデアをいただきました。

今年度で4年目となるアグリビジネスカフェ。農家と企業等との連携した取組が生まれるなど、異業種交流が促進されていますが、参加主体の固定化、農家側のニーズやメリットに深く訴求していくことなどが課題となっています。今年度は、できるかぎり多くの農業者が関わり、意見やアイデアが反映できる場を創出するとともに、「複数の主体による掛け算」を増やすことを重視しています。3つのプロジェクトを中心に、みんなで取り組み、チャレンジしていきます。

*今年度を実施する3つのプロジェクト

- ①みんなで京都市の農家を応援するプロジェクト
バイヤー等による勉強会・交流会を通じて、若手農家等が横のつながりを持ち（悩みも言い合いながら）、新事業を応援
- ②京野菜からはじまる地産地消プロジェクト
「京の伝統野菜」に着目し、流通業者や飲食店、消費者が関わり、農業者が作りがいのある取組をめざす
- ③みんなで耕す「京都市アグリビジネスカフェ」プロジェクト
具体的なテーマ（例：食育、有機農業、農福連携…）を設定し、気軽に情報交換や交流ができる場を創出し、アクションにつなげることをめざす

3D都市モデルを活用した景観デザインワークショップを開催しました！

竹中健起：

都市・地域プランニンググループ

板橋区赤塚四・五丁目地区（以下、赤塚地区）の景観まちづくりについて、レターズでここ最近シリーズ化しておりますが、地域住民の勉強会「フムフムあかつか PROJECT」第6弾、3D都市モデルを活用した景観デザインワークショップを開催しました。

3Dツール「torinome」を活用し、崖線や斜面地等、赤塚地区が有する特徴的な地形にうまく馴染むような建物デザインを3D都市モデルで再現しながら、赤塚地区にふさわしい景観ルール（建物の色彩・配置・高さ・外構等）について意見交換を行いました。

ワークショップの中では、「派手な外壁色だと崖線の緑に目がいけない」、「長大な壁面だと圧迫感を感じる」、「石積擁壁がそりゃ良いが値段が高すぎる！」等、参加者全員で3D都市モデルを見ながら、あれやこれやと様々な意見が出てきました。

昨年度は、アナログ的にイラストでまちなみを再現し、ふさわしい建物デザ



斜面地における擁壁のデザインルールを意見交換上：コンクリート擁壁 下：化粧擁壁（石積風）

インのアイデアを出し合いましたが、今回は3D都市モデルの活用により、理解が難しい地域の景観について、参加者の想像力を掻き立てながら、よりリアルに即した意見交換ができたかと思っています。

一方で、3Dモデルの再現性の問題（石積がリアルじゃない等（笑））や運用上の問題（操作には一定のスキルが必要、参加者が自由に触りながら実施できるとアイデアも活発化するか）といった、ワークショップツールとしての課題も見えてきたのかとも個人的に思います。3D都市モデルを活用した直感的理解のサポートにより、質の高い地域住民の意見・アイデアの吸い上げや、市民参加の促進等に向けて、試行錯誤を重ねながら使いこなしていければと思います。

近況 & イベントのお知らせ

大阪

大阪事務所を模様替えしました
～成長していく『グリーン&スマート+コミュニケーション』へ～

大阪事務所環境委員会 山本昌彰

大阪ビジネスパークから今の淀屋橋に移転し、はや8年。移転当時でも個人空間を縮小し、共用空間などの拡大など、かなり大幅に改善を行ったつもりでしたが、それでも打合せスペースなどが手狭になってきていました。また、最近、オンライン会議などの個人利用などの需要も増え、この度模様替えを行いました。主な改善箇所は「①新たな共用打合せスペース新設」「②応接用打合せコーナー改善」「③接客窓口空間改善」の大きく3箇所。

模様替えの目的は、オンラインやコワーキングなど、いわゆるDX時代の新しい環境に対応させていくとともに、クリエイティブかつコミュニケーションを大事にした空間をつくること。コンセプトは「グリーン&スマート+コミュニケーション (GS+C)」。(とくに環境委員で話し合ったわけでもなく、筆者が勝手な思いで命名しました！(笑))

①新たな共用打合せスペースは、建物のコーナーをうまく活用した、ガラス張りのミーティングルーム。



この中に個人のオンライン用のブースもいくつか含めています。ガラス張りなのに、完全防音で外の雑音をシャットアウトし、“クリエイティブ”な執務空間を実現させました。もう一つの特徴は、コンセプトの“グリーン(緑)”。ガラス張りであることを活かし、外の個人執務空間からもその緑が確認でき、快適な環境をつくっています(写真上)。「②応接用打合せコーナー」と「③接客窓口空間」は、来所される方との接点となる非常に重要な空間です。弊社の“スマート”な姿勢を表現し、来所される方にも“コンセプト”を共感いただけるよう、快適な空間として“新調”いたしました(写真下)。

利用状況などについてはまだ調査していませんが、これから“新しい事務所”を来所者の方とも一緒になって、(グリーンとともに)“成長”させていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

利用状況などについてはまだ調査していませんが、これから“新しい事務所”を来所者の方とも一緒になって、(グリーンとともに)“成長”させていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

坂井信行：
東京事務所長

界隈性のある街の魅力とこれからのまちづくり

都市計画学会と都市計画コンサルタント協会のコラボによる「民間都市プランナーと学識経験者のコラボレーションによる社会的要請に応じた政策立案とその実装に向けた研究交流分科会」という長い名前の取組があります。民間都市プランナーの実践的視点と学識経験者の学術的視点の触発により、産学官民の連携の推進、民間都市プランナーの職能の向上や学会における活動機会の拡大につなげることを目的とするものです。これまでに「界隈性のある街の魅力」をテーマにまち歩きやミニ講演会、ディスカッションを行ってきています。

この活動の一環として、11月2日に北九州市で開催された今年度の都市計画学会の全国大会において「界隈性のある街の魅力とこれからのまちづくり」と題するワークショップを行いました。これまでの活動を振り返りつつ、①界隈性のある街の魅力は何か、②界隈性のある街を守り育てる方法、の2つの議題で登壇したメンバーやフロアの参加者と議論をしました。

界隈性のある街の魅力については、親密感のある

ヒューマンスケールの空間であること、人の営みが息づいていることを実感できること、ほっとできる安心感と怪しさのあるドキドキ感が共存していることなどが挙げられました。また、界隈性のある街を守り育てる方法については、界隈の空間の特徴を読み解くこと、自由を担保することで自然発生の魅力を生かすこと、失敗を許容する寛容性をもつことで多様な営みを誘発すること、既存の規制を緩和することなどが挙げられました。

議論の中では、界隈の魅力は一定の時間の蓄積や背後にある人々の価値観とも関係すること、主役があってこそ界隈の魅力が生きるといった指摘もありました。近年取り上げられることの多い居心地の良さやウォーカブルという概念には単純にあてはまらない界隈性のある街の魅力の本質に、少しは近づけたのではないかと手応えを感じました。



ワークショップのようす

Ring!



「Ring!」は、アルパックの中のことをお伝えするコーナーです。
アルパックと読者を「つなぐ」リング、情熱を見せる「土俵 (!?)」
としてのリング、そして「ちょっと注目!」のリンリン!
この「Ring!」からいろいろなアルパックを覗いてみてください。

「刺激的! サマーインターンシップ」



ま ちづくりのコンサルって何するの? そんな疑問にお答えするべく、アルパックでは初となる「サマーインターンシップ」を開催しました。学生さんが今後進路選択や研究をする上で、その参考にしてもらうことが目的です。…と同時に、優秀な学生さんにぜひアルパックを将来の選択肢に入れてほしい♡という下心もあります。

そのため、今回は「半日座って話を聞いていたら、なんとなくこの会社のことがわかった気がするプログラム」ではなく、ステークホルダーとの打ち合わせや調査、プレゼンなど、実際の業務の流れをぎゅぎゅっと濃縮して、「2日間で満足感・達成感のあるプログラム」にすることにこだわりました。

参 加した学生さんは、関西だけではなく、関東・東海・中国・九州と、全国各地からお越しいただき、総勢 21 名。そのほとんどが大学の指導教官からのご紹介でした。(先生方、優秀な学生さんをご紹介いただきありがとうございました!)

まずは企業概要や業務の流れ、今回の課題をザッと説明した後、グループワークがスタート。各テーブルにはメンター役の若手~中堅所員が参加し、議論を盛り上げたり、サポートしたりしていきます。驚いたのは、学生の皆さんのチームビルドのはやさ! まちづくりへの強い関心と同じ業界を志す者同士という共通点があるからか、2日間という短い期間で濃い議論と手際のよい作業分担を行い、運営側の予想をはるかに上回る提案を作りあげてくれました。

イ ンターンシップの締めくくりは、所内のオープンラウンジでの打ち上げです。参加してくれた学生さんの顔からは「やりきった!」という満足感が感じられ、とても気持ちのいい空間となりました。社長をはじめ、学生さんの頑張りを聞いていた所員達もホクホク顔で交流し、話に花を咲かせていました。

は じめての試みに、運営上の至らぬ点や課題は多々ありましたが、実施後の参加者アンケートでは**満足度 100%!** (回答率 95%) 「やりがいを感じた」「刺激的でエキサイティングな仕事」「成長できた」「研究に生かしたい」「もっと専門性を追求したい」といった嬉しい声をたくさんいただき、私たちにとっても非常に刺激的で満足度の高い2日間となったのでした。

/ Ring! /



たのもしー若手所員!

目的意識を持って仕事に取り組むアルパックの若手所員はとて心強く、主体的。そしてコンサルという職業柄、頼りにすると120%の力で応えてくれます。
インターンシップのプログラム作成も、若手~中堅所員が忙しい業務の合間を縫って、採用担当の相談にのり、アイデアを出し、率先して準備に協力してくれました。

/ Ring! /



イレギュラーを楽しむ!

アルパックの仕事はイレギュラーの連続です。クライアントの依頼に対し、ヒアリングや現地調査、社会実験を経て、当初とは全く異なるアウトプットになることもあります。ステークホルダーの合意形成に奔走したり、専門外のことを勉強したりしなければならないことも。それらを楽しみ、自分の成長につなげるタフさが所員の共通点です。

/ Ring! /



ワイガヤタイムが大好き!

元々は京都大学研究室発のベンチャー企業・アルパック。組織風土は「会社」というより「研究室」に近いと言われています。そのため、みんなで集まってお酒を飲みながら、ワイワイガヤガヤと気軽に議論を交わすことが大好き! インターンシップ後の打ち上げも、所員の方が楽しんでたかもしれません (笑)



大学生時代にボランティアをした伏見ビル(公開建築)

増見康平
建築プランニング・デザイングループ



ま
ち
か
ど

自分流

イケフェス大阪の歩き方

11月26日、27日の2日間で「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2024(イケフェス大阪)」が開催されました。

イケフェス大阪は毎年秋の週末に大阪の魅力ある建築を一齐に公開する、日本最大級の建築イベントです。私は、大学生時代から現在に至るまで、ボランティアや委託業務等で、毎年欠かすことなく、このイベントになにかしら関わっています。年を重ねる毎に公開建築が増えていくとともに、さまざまなプログラムの展開がみられ、非常に大きなイベント

となってきました。レターズ201号での『まちかど』でもご紹介させていただいたように、このイベントにおける私の楽しみ方は、公開建築をベースにまちをぶらぶらしながら建物を見る目を洗練させることで、公開建築以外の、魅力的で面白い建物を探すことです。



アールと角がうまく調和された建築(今回のイケフェスで発見した建築)



戦後復興期を醸す建築(今回のイケフェスで発見した建築)



寺田町プレイス1 塗装ワークショップの様子

近年では、1日目を目当ての建築の見学やプログラム参加の目的志向型として設定し、2日目を公開建築が最も集積している、船場・中之島近辺をぶらぶらと無目的にまちを巡る日とするのがマイブームです。また、建築の写真を撮る際に、人の写り込みを回避したい方は、2日目の15時以降がベターかと思います。参加者の疲れもあつてか、人が少なくなっている傾向にあります。建物の立地状況では西日が天敵にはなりかねませんが、...

なにより、普段、建築の写真を撮っているとは怪訝そうに見られることが多々ありますが、このイベント期間中に、このパンフレットを持っていれば、何も気にせず写真を撮れる限りです。

表紙写真：各地の建物公開イベントより(撮影 増見康平)

「レターズアルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
<https://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・京都事務所

〒600-8006 京都市下京区四条通柳馬場西入立売中之町99 四条SETビル2F TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所

〒541-0042 大阪市中中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所

〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所

〒101-0032 東京都千代田区岩本町3-1-9 NOVEL WORK Iwamotocho 5F TEL(03)5244-5132 FAX(03)5244-5140

九州事務所

〒810-0802 (株)よかネット:福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

滋賀営業所

〒527-0012 東近江市八日市本町9-19 SATSUKI-RO 内 TEL(090)1422-1096



再エネ100宣言
とRE Action



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
kikitoペーパーを使用しています。